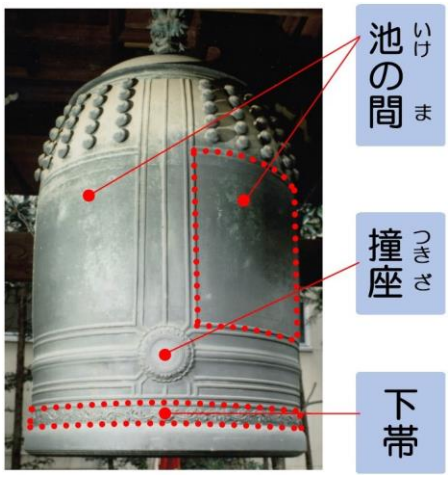
区内の梵鐘（ぼんしょう）

梵鐘は仏具のひとつで、仏教とともに日本に伝来したと考えられています。日本国内における製作の最盛期は鎌倉時代といわれ、関東地方にも鎌倉の建長寺（けんちょうじ）・円覚寺（えんがくじ）の両鐘（ともに国宝）をはじめ数々の優品が伝わっています。その後、南北朝時代から室町時代にかけて梵鐘の製作は全国的にひろまりました。江戸時代にも製作が盛んでしたが、第二次世界大戦時に供出（きょうしゅつ）されてその多くが失われました。

区内には江戸時代に製作された梵鐘が4口残されています。そのうち池上本門寺（いけがみほんもんじ）と宝幢院（ほうどういん）の2口は重要美術品（文化財保護法制定以前の国認定有形文化財）であったため戦時の供出を免れ、厳正寺（ごんしょうじ）と光明寺（こうみょうじ）（鵜の木（うのき）1-23-10）の2口も鋳潰される前に終戦を迎えました。なかには池上本門寺の梵鐘のように戦火をあびながら残ったものもあります。ここではそのうち区指定文化財の3件をご紹介します。



池上本門寺（池上1-1-1）

区指定文化財（有形・金石文）

交通アクセス：東急池上線池上駅から徒歩10分

昭和49年（1974）2月2日指定

総高225.0㎝　口径170.0㎝

正徳（しょうとく）4年（1714）、本門寺23世日潤（にちじゅん）の代に紀州粉川（和歌山県北部の地名。粉河（こかわ））の鋳物師（いもじ）木村将監（しょうげん）安成によって鋳造された梵鐘です。日潤住持の間、宝永（ほうえい）7年（1710）には大火が発生し、五重塔を残して伽藍（がらん）のほとんどが焼失したといいます。この時に損傷した梵鐘を改鋳したものが、この梵鐘であると伝えられています。「仏法繁昌広宣流布」や「天下泰平国土豊饒」、「両山※永盛」を願うとともに、紀州藩主の妻子4名、芳心院（初代藩主頼宣（よりのぶ）の娘）、天真院（2代藩主光貞（みつさだ）の正室。照子（てるこ）女王）、円光院（光貞の娘）、寛徳院（5代藩主・8代将軍吉宗（よしむね）の正室。理子（さとこ）女王）の供養も兼ねています。

4区設けた池の間のひとつに「鐘銘幷序」と題した本門寺16世日遠（にちおん）撰の銘文が刻まれており、宝永火災で損傷した旧鐘は、正保（しょうほう）4年（1647）、本門寺17世日東（にっとう）の代に紀州徳川頼宣の正室瑤林院（加藤清正の娘）によって寄進された梵鐘であったことがわかります。

旧鐘の寄進者である瑤林院や頼宣の母養珠院（お万の方）をはじめとして熱心な日蓮宗信者の多い紀州徳川家は代々本門寺に帰依し、山内には関連の遺品が多く伝わっています。改鋳鋳物師に紀州の人を採用したこの梵鐘も、そのひとつに加えられます。

※「両山」池上本門寺（長栄山）と鎌倉比企谷妙本寺（ひきがやつみょうほんじ）（長興山）のこと。昭和初期まで、一人の貫首が両山を統括していました。

厳正寺（大森東3-7-27）

区指定文化財（有形・金石文）

交通アクセス：京浜急行本線大森町駅から徒歩8分

昭和49年（1974）2月2日指定

総高143.5㎝　口径76.0㎝

安永元年（1772）、厳正寺17世祐尊の代に品川の鋳物師渡部亦市によって鋳造された梵鐘です。歴代住職の事跡を記録した『厳正寺旧記』（寺蔵）によると、この梵鐘の新鋳については幕府と本山（京都・西本願寺）の許可を取り、寺内で鋳造したといいます。

4区設けた池の間のうち第2・3区には寄進者の名が刻まれており、その多くは大森村など近郷に住む檀信徒です。なかには堀之内（大森村内の集落）の十二日講中、十四日講中、十五日講中と川端（同前）の九日講中といった講集団の名も見え、この地域における浄土真宗系講集団の存在を示す資料としても貴重です。個人の寄進者に加えて講による寄進がみられるのは区内4口のなかでは厳正寺のものだけで、寺院と講のつながりの強さがうかがえます。

宝幢院（西六郷2-52-1）

区指定文化財（有形・金石文）

交通アクセス：①京浜急行本線雑色駅から徒歩13分

昭和49年（1974）2月2日指定

②蒲田駅西口から東急バス〈蒲01 六郷土手行〉で「西六郷三丁目」下車2分

総高179.0㎝　口径99.5㎝

延宝9年（1681）、宝幢院18世辨（弁）栄が願主となって近郷末寺に寄進を募り、鋳物師椎名伊予守良寛によって鋳造された梵鐘です。多摩川の河原で鋳造されたとの伝えもあります。

椎名家は吉次を初代とする江戸在住の鋳物師の名家です。良寛は延宝9年（1681）から元禄13年（1700）のものまで、18件の鋳造品でその名が確認されています。寛永寺厳有院（4代将軍家綱）霊廟宝塔や護国寺燈籠などを製作していることから徳川将軍家お抱えの御用鋳物師であったとみられます。宝幢院梵鐘においても、所々に見受けられる卓越した鋳技や、撞座や下帯の唐草文などの装飾的意匠から一流の仕事ぶりがうかがえます。

また、池の間に刻まれた銘文には寄進に応じた宝幢院檀信徒と思われる人々の姓名・村名が記されています。地元六郷領の各村に加えて、川崎の渡田村など多摩川対岸の地名も見え、当時の檀家・信者の構成を知るうえでも貴重な資料です。